

「仕事」について考える

～幸せな人生を送る「ポイエーシス」的な働き方とは？～

校長 丸木 克朗

進路を考えることは、自分の生き方を考えることです。人生の大半の時間を費やす仕事が、苦しいだけか、あるいは、楽しくやりがいのあるものになるかは、大きな問題です。仕事に対する概念は、国や時代によって違いがあるようです。たとえば、フランスで「労働」にあたる言葉「トラバーク」には「労苦」という意味があるそうです。「労働は神が人間に与えた罰」という宗教的な考え方が根底にあるのかも知れません。

対して、日本の労働観は、単なる「労苦」ではなく、近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」に代表されるように、「利益」のみではなく、社会に貢献することも大切に考えてきました。これは、「報酬」や「役職」を最重要視する現代的労働観とも異なっているように感じます。「仕事」について考えることは、社会の在り方、経済の在り方、ひいては人生の価値観について考えることにもつながります。

古代ギリシャでは、働くことを「プラクシス」と「ポイエーシス」という二つの言葉で分けて表現していました。前者は「外部から強制的に、やらされる仕事」後者は「興味や価値観に従って、自分からやりたくてやる仕事」と捉えることができると思います。フランスの人類学者レヴィ＝ストロースは、日本の職人の仕事ぶりを観察し、本来素材が持つ魅力を引き出すことに喜びとやりがいを感じながら進める作業を「ポイエーシス」的労働であるとししました。自分の仕事が「ポイエーシス」であったならば、非常に有意義で幸せな人生を送ることが出来るでしょう。

さて、ここで問題なのが、「ポイエーシス」であるために、「自分の興味関心、本当に好きなこと、やりたいこと」を知ることです。言い換えると、この「本当に好きなこと、やりたいことを知る」ことこそが自分の進路を考えることに他なりません。ただし、好きなものが、最初から自分の中に存在するわけではありません。何も経験していないうちは、「好き」も「嫌い」もないことを考えれば分かります。いろいろな経験や苦労を重ね、費やした時間や成功、失敗から「好き」や「嫌い」も生まれてくるのでしょ

う。だから、本当にやりたいものを知るために自分から何事にも積極的に挑戦して、幅広い経験をしましょう。「何かを学ぶために、自分で体験する以上に良い方法はない」と言ったのはアインシュタインです。自分の経験だけでは限りがあるので、いろいろな人から助言をいただいたり、様々な資料を参考にすることも良いでしょう。しかし、最後の決断だけは、あなた自身が行ってください。あなたの人生を誰のせいにもしないために。

さあ、自立へのカウントダウンはすでに始まっていますよ！